

専門高校女子生徒の将来像

—ライフコース戦略と職業アスピレーション—

宮本 幸子 (Benesse 教育研究開発センター研究員)

◇要約

- ◎近年ライフコースを戦略的に発想していくことの重要性が指摘されている。進路形成に問題を抱えやすい進路多様校の女子生徒においては、特にその必要があるだろう。
- ◎進路多様校のなかでも、専門高校の女子生徒のほうが、普通科高校の女子生徒に比べて「仕事本位志向」が強い。しかし、「家事・育児志向」をあわせて考えると、専門高校のライフコース戦略では「両方重視」タイプが多くなった。
- ◎この点に関して職業アスピレーションとの関連を検証すると、専門高校の「職業志望あり」群で「両方重視」タイプが多く、特に非ASUC 職業志望者においてそうした傾向が見られた。

1 問題設定

本稿では、専門高校に通う女子生徒の将来像に着目する。ここでの「将来像」とは、具体的にはライフコース戦略（仕事に対する志向、家事や育児に対する志向）と職業アスピレーションを指す。本稿では、専門高校女子生徒のライフコース戦略の特徴を示すとともに、彼女たちの戦略に影響するであろう職業アスピレーションとの関連を分析し¹、将来像を明らかにする。

ここでは「ライフコース」に、あえて「戦略」という言葉をつけた。吉川（2001）が指摘するように、高校生はライフコースにおける最初の重要な選択が迫った時期である。そして、山田（2008）や木村（2009）などが指摘するように、雇用環境や結婚関係が不安定化している現在、リスクヘッジのために、ライフコースの選択において従来の性別役割分

業にとらわれない戦略性が重要である²。研究対象としても、高校生の将来像を彼女たちにとっての戦略としてとらえる必要があるだろう。

近年の女子高校生の将来像についての研究には多様な切り口のものがあるが、多くは中上位の普通科高校を主要な分析対象とし、専門高校は比較対象にとどまっている（吉川2001；中村2003；元治2004；片瀬・元治2008；元治・片瀬2008など）。今回の調査対象は、進路多様校の専門高校と普通科高校である。進路多様校の女子生徒は、そのライフコースを考えたときに、二重の問題を抱えている。第1の問題は、進路多様校の生徒は、より性別役割分業観に影響された将来像を描きやすい点である。たとえば中村（2003）の分析では、進学校を除いた普通科高校や専門高校の女子生徒ほど、「女性向き」職業志望が多く、結婚後も仕事をすると回答した生徒は少ない

という結果が出ている。

第2の問題は、進路多様校の生徒が『『夢追い』型進路形成』（荒川 2009）の負の影響を受けやすい点である。90年代以降、進路形成は「興味・関心」「将来の夢」を重視する潮流にある。このなかで、進路多様校の生徒が「興味・関心」や「夢」に邁進してしまうことで、競争から降りるメカニズムがあることが指摘されている。特に荒川（2009）は、ASUC職業＝「Attractive（人気）・Scarce（稀少）・UnCredentialized（学歴不問）」の志望と進路形成のあり方を分析している。ASUC職業とは、近年高校生の間で人気が高まっているが、「人気がある割には職業に就ける人口が極めて少なく、ほぼ、なることが出来ない（荒川 2009:83）」職業であり、結局フリーターやニートになる確率が高いという。具体的には「デザイナー（ファッションデザイナー、フラワーデザイナーなどを含む）」「メイクアップアーティスト」「トリマー」など、女子生徒に人気が高いことが予想される職業も多く含まれている。このような進路形成のメカニズムは、どちらかといえば普通科進路多様校の問題として扱われてきたが、進路の水路づけ機能低下が指摘される専門高校においても考慮される必要がある³。

こうした二重の問題を抱えている彼女たちこそ、実際の選択が近づきつつある今、戦略的なライフコースイメージが重要なのではないだろうか。本稿では専門高校女子生徒の将来像を明らかにし、最終的にはライフコースの戦略性という観点から考察を加えたい⁴。

なお、本稿は専門高校と普通科高校の比較を主としているため、分析時にはウェイト1を使用した。

2 変数の設定

主要な変数の作成方法について説明する。

・ライフコース戦略①——「仕事本位志向」

Q53E「働かずに生活できるなら、働きた

くない」を用いる。この志向は、女性のライフコースにおいて考えると、夫の収入に頼って自らの就業を断念・中断するという意味を帯びてくる。逆にこれを否定する場合、就業に積極的な志向があるといえ、本稿では「仕事本位志向」と呼ぶ。ライフコース戦略の観点からは非常に重要であると考えている。

分類は「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した生徒を「仕事本位志向弱」、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した生徒を「仕事本位志向強」とした。

・ライフコース戦略②——「家事・育児分担志向」

Q52「あなたは、将来結婚するとしたら、家事・育児の分担はどのようにしたいと思えますか」に、「どちらかといえば妻がおこなう」「妻がすべておこなう」とした生徒を「妻型」、「夫がすべておこなう」「どちらかといえば夫がおこなう」「夫と妻が同じくらいおこなう」「結婚するつもりはない」とした生徒を「非妻型」とした⁵。

また、分析中では上記の2変数をクロスさせ、表1のようなライフコース戦略の4類型を作成した。自身が直接かわることを想定しているか否かという点から、「妻型・仕事本位志向強」を「両方重視」タイプ、「非妻型・仕事本位志向強」を「仕事重視」タイプ、「妻型・仕事本位志向弱」を「家庭重視」タイプ、「非妻型・仕事本位志向弱」を「重視なし」タイプと呼ぶこととする。

・職業アスピレーション——職業志望の有無およびASUC職業志望

職業志望の有無については、Q49「あなたは、将来やりたい仕事どれくらい具体的に決まっていますか」に、「考えてはいるが、まだ決まっていない」「考えたことがない」と回答した生徒を「職業志望なし」、「はっきりと決まっている」「なんとなく決まっている」と回答した生徒を「職業志望あり」とした。

表1 ライフコース戦略の4類型

	仕事本位志向弱	仕事本位志向強
家事・育児分担志向 妻型	「家庭重視」タイプ	「両方重視」タイプ
家事・育児分担志向 非妻型	「重視なし」タイプ	「仕事重視」タイプ

表2 女子生徒の「職業志望」

分析対象は女子生徒 Q49×Q1B

学科 (2分類)	職業志望あり			職業志望 なし	合計	N
	ASUC 職業志望	非ASUC 職業志望	具体的 記述なし			
専門高校 (%)	13.8	28.2	6.0	52.0	100.0	(962)
普通科高校 (%)	15.6	23.7	9.8	50.9	100.0	(224)
合計 (%、参考)	14.2	27.3	6.7	51.8	100.0	(1,186)

さらに、「職業志望あり」群を、具体的な職業の記述をもとに「ASUC職業志望」と「非ASUC職業志望」に分類している。ASUC職業の分類に際しては、荒川(2009:76-82)の定義や具体的な内訳を参照した。また、ASUC職業希望を主要な変数として高校生の希望進路の規定要因を分析した、長尾(2009:118-9)の分類基準も参照した。たとえば同一個人の回答でASUC職業と非ASUC職業が併記されていた場合は、非ASUC職業志望者に分類している。この結果、女子生徒の職業志望は表2のように分類された⁶。

分析は、第1に女子生徒のライフコース戦略を学科別に検証し、専門高校の特徴を示す。第2に、ライフコース戦略と職業アスピレーションとの関連を、学科別に検証する。

3 分析

3.1 ライフコース戦略の検証

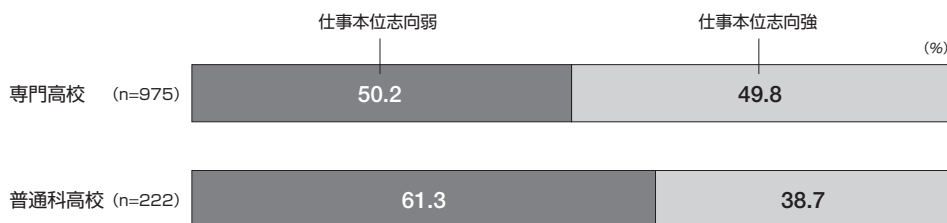
まずはライフコース戦略——仕事本位志向、家事・育児分担志向、両者をクロスさせた4類型——が学科によってどのように異な

っているか、検証したい。

図1では、学科別に仕事本位志向の強弱の比率を示している。これを見ると、専門高校で仕事本位志向の強い生徒は49.8%と普通科高校に比べて多く、1%水準で有意となっている。図2では学科別に家事・育児分担志向を見たが、有意差はなかった。専門高校の生徒であることは、仕事本位志向のみと相関があることがわかる。おそらくもともとそうした志向が強い生徒が入学してくる側面と、実際の教育活動を通してより志向を強めていく側面があるのだろう。

さらに、「仕事本位志向」と「家事・育児分担志向」で作成した4類型を従属変数とし、クロス集計をした結果が表3である。表3は1%水準で有意となっている。特に差が大きいのは「両方重視」タイプで、10ポイント近い差が見られる。2変数の関連を詳細に確かめるため、表には調整残差を載せた⁷。残差を見ると、「両方重視」タイプが1%水準で有意、「重視なし」が5%水準で有意となっている。専門高校では普通科高校と比べて仕事本位志向が強いことはすでに指摘したが、そ

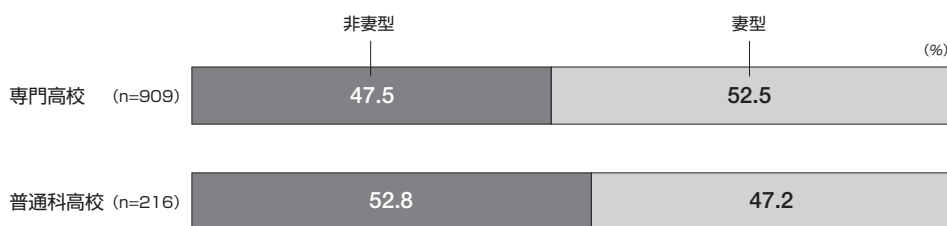
図1 「仕事本位志向」×「学科」（分析対象は女子生徒）



注1) p=0.003。

注2) 専門高校の生徒についてさらに学科別にクロス集計をしても、有意差は見られなかった。

図2 「家事・育児分担志向」×「学科」（分析対象は女子生徒）



注1) p=0.165。

注2) 専門高校の生徒についてさらに学科別にクロス集計をしても、有意差は見られなかった。

表3 「ライフコース戦略の4類型」×「学科」

学科 (2分類)	ライフコース戦略の4類型				合計	N
	重視なし	家庭重視	仕事重視	両方重視		
専門学校 (%)	22.0 (-2.4)	27.1 (-1.4)	25.5 (0.8)	25.4 (3.0)	100.0	(894)
普通科高校 (%)	29.9 (2.4)	31.8 (1.4)	22.7 (-0.8)	15.6 (-3.0)	100.0	(211)
合計 (%、参考)	23.5	28.0	25.0	23.5	100.0	(1,105)

分析対象は女子生徒 Q53E・Q52×Q1B
1%水準で有意 p=0.004

注1) 各セルの()内数値は調整残差。5%水準で有意な場合は太字にしている。

注2) 専門高校の生徒についてさらに学科別にクロス集計をしても、有意差は見られなかった。

のなかでも家事・育児を自分が担う「両方重視」タイプが多いのである。

以上より、専門高校の女子生徒は普通科高校の女子生徒と比べて、①仕事本位志向が強いこと、②そのなかでも「両方重視」タイプが多いこと、の2点が明らかになった。

3.2 ライフコース戦略と

職業アスピレーションの関係

つづいて、女子生徒のライフコース戦略と職業アスピレーションとの関係を見ていきたい。専門高校の女子生徒が描く将来像には、どのような特徴があるのだろうか。

表4 「ライフコース戦略の4類型」×「職業志望の有無」×「学科」

分析対象は女子生徒 Q53E・Q52×Q49×Q1B

学科 (2分類)	職業志望の 有無	ライフコース戦略の4類型				合計	N
		重視なし	家庭重視	仕事重視	両方重視		
専門学校	職業志望あり (%)	15.8 (-4.2)	24.2 (-2.0)	27.8 (1.8)	32.1 (4.3)	100.0	(417)
	職業志望なし (%)	27.5 (4.2)	30.4 (2.0)	22.6 (-1.8)	19.5 (-4.3)	100.0	(451)
	合計 (%)	21.9	27.4	25.1	25.6	100.0	(868)
0.1%水準で有意 p=0.000							
普通科高校	職業志望あり (%)	28.2 (-0.4)	23.3 (-2.6)	34.0 (3.7)	14.6 (-0.5)	100.0	(103)
	職業志望なし (%)	30.5 (0.4)	40.0 (2.6)	12.4 (-3.7)	17.1 (0.5)	100.0	(105)
	合計 (%)	29.3	31.7	23.1	15.9	100.0	(208)
1%水準で有意 p=0.002							

注) 各セルの () 内数値は調整残差。5%水準で有意な場合は太字にしている。

まずは職業志望の有無を入れた表4を検証したい。ここでも2変数の連関のしかたを検証するため、調整残差を掲載している。まずカイ2乗検定の結果を見ると、専門学校では0.1%水準、普通科高校でも1%水準で有意となっており、どちらの学科においても、将来の職業志望の有無によってライフコース戦略に差があることがわかる。

しかし、専門学校と普通科高校では差を生じる部分が異なっている。まず普通科高校の残差を見ると、「家庭重視」タイプと「仕事重視」タイプが有意となっており、ここで差が生じていることがわかる。

一方、専門学校を見ると、「家庭重視」タイプの調整残差が有意である点は、普通科高校と共通している。加えて専門学校独自の傾向として、「職業志望あり」群では「両方重視」タイプが多くなり、「職業志望なし」群では「重視なし」タイプが多くなる点を指摘できる。比率(%)で見ると、「職業志望あり」群では最頻値が「両方重視」タイプの32.1%である。表3で、専門学校では「両方重視」

タイプが多くなるという傾向を確認したが、そこに寄与しているのがこの「職業志望あり」群であると考えられる。

この「職業志望あり」群について、ASUC職業志望者/非ASUC職業志望者に分類して行ったクロス集計が表5である。

表5では専門学校の数値に着目したい。調整残差を見ると「仕事重視」タイプと「両方重視」タイプが有意になっている。すなわち、ASUC職業志望者と非ASUC職業志望者の間で差が生じるのが、この2つのタイプということになる。比率(%)で見ても、ASUC職業志望では「仕事重視」タイプが最頻値になっているのに対して、非ASUC職業志望では「両方重視」タイプが最頻値になっている。専門学校の女子生徒に特徴的な「両方重視」タイプは、特に非ASUC職業志望者に多いことがわかる。

またこの表5からは、専門学校では、ASUC職業志望者であっても、非ASUC職業志望者であっても、「仕事本位志向」が強いことがわかる。「仕事本位志向」が強い「仕事重視」

表5 「ライフコース戦略の4類型」×「ASUC職業志望」×「学科」

		分析対象は女子生徒 Q53E・Q52×Q49×Q1B				合計	N
学科 (2分類)	ASUC 職業志望	ライフコース戦略の4類型					
		重視なし	家庭重視	仕事重視	両方重視		
専門高校	ASUC職業志望者 (%)	15.5 (-0.1)	25.9 (0.4)	34.5 (2.3)	24.1 (-2.4)	100.0	(116)
	非ASUC職業志望者 (%)	16.0 (0.1)	24.1 (-0.4)	23.0 (-2.3)	37.0 (2.4)	100.0	(257)
	合計 (%)	15.8	24.7	26.5	33.0	100.0	(373)
						5%水準で有意	p=0.044
普通科高校 (参考)	ASUC職業志望者 (%)	26.7 (-0.6)	23.3 (-0.4)	43.3 (1.3)	6.7 (-0.7)	100.0	(30)
	非ASUC職業志望者 (%)	32.7 (0.6)	26.9 (0.4)	28.8 (-1.3)	11.5 (0.7)	100.0	(52)
	合計 (%)	30.5	25.6	34.1	9.8	100.0	(82)
						有意差なし	p=0.582

注1) 各セルの()内数値は調整残差。5%水準で有意な場合は太字にしている。

注2) 普通科高校はASUC職業志望者のケース数が少ないため、参考値として掲載している。

タイプと「両方重視」タイプを合わせた数値は、ASUC職業志望者で58.6%、非ASUC職業志望者で60.0%となり、差は見られない。すなわち、ここで両者を分けているものは「家事・育児分担志向」である。この点は、次節「結論と考察」で再度振り返ることになる。

以上、ライフコース戦略と職業アスピレーションとの関係をクロス集計によって検証してきた。専門高校に関する知見をまとめると、①職業志望の有無によって「両方重視」タイプや「重視なし」タイプの比率に違いが生じる。②専門高校に特徴的な「両方重視」タイプは、非ASUC職業志望者においてより多くなる。この2点が明らかになった。

4 結論と考察

以上、本稿で明らかになったことをまとめる。まず専門高校の女子生徒のほうが、普通科高校の女子生徒に比べて仕事本位志向が強い。しかし、家事・育児を含めて考えたライフコース戦略では、「両方重視」タイプが多く

なる。この点に関して職業アスピレーションとの関連を検証すると、専門高校の女子生徒のなかでも「職業志望あり」群に「両方重視」タイプが多く、特に非ASUC職業志望者にそうした傾向が見られた。

本稿は、女子生徒の将来像に関して専門高校の特徴を浮かび上がらせ、最終的にライフコースの戦略性という観点から考察を加えることを目的としていた。その際に、彼女たちの選択に大きく影響するであろう職業アスピレーションとの関連を検証し、「『夢追い』型進路形成」のリスクが想定される層であることから、ASUC職業志望との関連を分析した。

分析結果を見ると、まず「夢追い」をしている層、すなわちASUC職業志望者には「仕事重視」タイプが多く、ライフコース戦略に関しては、性別役割にとらわれない生徒が多いようだ。しかし、ASUC職業とは実現可能性が非常に低い職業である。仕事に就くことができなければ、彼女たちの描く「仕事重視」タイプのライフコースは、「絵に描いた餅」になってしまう。

一方で専門高校独自の特徴として浮かび上がってきたのは、「夢を追わない」生徒たちのライフコース戦略である。もっとも特徴的であったのが、非ASUC職業志望者の「両方重視」志向であった。すなわち、実現可能性の高い仕事を志望し、仕事も、家事・育児もこなす将来像である。近年、「夢追い」層の問題や、性別役割の「いいとこどり」をする若者の傾向が指摘されるなか、このように「まじめ」な将来像を描く生徒たちがいることを改めて強調しておきたい。しかしライフコースにおける戦略性を考えると、「両方重視」志向はその強い仕事本位志向に反して、彼女たちを仕事から遠ざけてしまうリスクを抱えている。すなわち、家事・育児に従事することで仕事を断念せざるを得ない可能性を含んでいるのである。

なぜ専門高校の女子生徒にはこのような特徴が生じるのだろうか。ここからは推察に過ぎないが、非ASUC職業志望者の「両方重視」志向は、専門高校ゆえの仕事本位志向の強さと、進路多様校ゆえのジェンダー・トラックの問題が絡んだ結果であると考えられる。表5の検討で、ASUC職業志望者と非ASUC職業志望者の間で差が生じているのは「家事・育児分担志向」の比率であることを指摘した。また、専門高校の非ASUC職業志望者で「両方重視」タイプに該当する女子生徒の、志望

職業の自由記述を見てみると、多いものは「保育士、幼稚園の先生（12名）」「事務（12名）」などである。これらはジェンダーと職業の研究でしばしば用いられる「女性向き」の職業——女性の「適職」と見なされ、現実社会でも女性の希望者が多い職業——である。つまり、彼女たちは進路多様校に多い「女性向き」なライフスタイルや職業を志向する傾向をもちながらも、専門高校生に多い、「仕事本位志向」を強くもった存在であることが考えられる。

この背景には、女性が堅実に仕事をもつには、「女性向き」の職業のほうが適しているという社会の仕組みがある。結局そうした構造のなかで、「まじめ」な女子生徒が、強い仕事本位志向に即して将来を考えるほど、性別役割分業との間で葛藤する可能性を抱えてしまう。

しかし、筆者は専門高校の生徒の仕事本位志向の強さを評価しており、この志向の強さはライフコース戦略の観点からは非常に重要である⁸。強い意欲をもった彼女たちを労働力としていかせないのは、社会にとっても損失である。その意欲をそがないためにも、職業教育・職業観養成という観点だけではなく、長期の就業を実現可能にするライフコースモデルを、おとなが提示できるようになっていく必要があるだろう。

〈注〉

- 1 元治（2004）は仙台圏の高校生調査のデータを分析し、女子高校生の職業アスピレーションは自らが志向するライフデザインを反映しているという結果を提示している。
- 2 山田（2008:69-70）は、現在のライフコースにおいては従来の性別役割分業にこだわらない「戦略的発想」が重要で、性別にかかわらず仕事、家事能力を持つておくことがリスクヘッジになるとしている。また、木村（2009）も、雇用環境の悪化による性別役割分業のリスクを鑑みて、高校生にとっての「戦略的な選択」の重要性を指摘している。
- 3 堀（2002）や片瀬（2005）は、専門高校における進路の水路づけ機能の低下と、それに伴う高卒無業者増加の可能性を指摘している。実際、本調査のデータでも、専門高校のASUC職業志望者には、卒業後の進路で「パート・アルバイト」を考えている生徒が有意に多くなっている（付表参照）。また、専門高校の女子生徒の具体的なASUC職業記述には、パティシエ（13名、うち10名農業科）、イラストレーター（11名、うち9名工業科）など、学科の専門性との対応が予想される職業もあるが、ミュージシャン・音楽（14名）、声優（7名）など、必ずしも学科の専門性に対応した職業ばかりではない。荒川（2009）や片瀬（2005）が指摘するように、非現実的な夢を追う傾向は特定の学校種・学校ランクに限った問題ではなく、若者全体にかかわる問題であるといえるだろう。

付表 専門高校女子生徒の「卒業後進路志向」

分析対象は専門高校の女子生徒 Q46×Q49

ASUC職業志向	卒業後進路							合計	N
	四年制 大学	短大	専門学校	就職	パート・ アルバイト	未定	その他		
ASUC職業志望者 (%)	24.1	1.5	39.8	9.8	9.0	15.0	0.8	100.0	(133)
非ASUC職業志望者 (%)	26.5	7.0	22.4	37.9	0.0	5.9	0.4	100.0	(272)
合計 (%)	25.7	5.2	28.1	28.6	3.0	8.9	0.5	100.0	(405)

0.1%水準で有意 p=0.000

注) 普通科高校でも同様のクロス集計を行ったが、ケース数が少なく(ASUC職業志望者36名、非ASUC職業志望者52名)、「就職する」～「その他」のカテゴリーは、すべてのセルでケース数が5未満となったため、表は割愛した。参考までに、四年制大学志向はASUC職業志望者13.9%<非ASUC職業志望者30.8%(以下同様)、短大志向は2.8%<15.4%、専門学校志向は55.6%>32.7%である。

- 現状で選択場面が圧倒的に多く、家庭生活に対しても当事者意識が強いのは女性であるため、本稿の分析対象は女子生徒に限定した。男性のライフコースにおける戦略的発想も重要な論点であり、男子生徒の分析は今後の課題とする。
- 本稿ではライフコースにおける戦略性という観点から変数の設定を考えた。ここでは、より性別役割分業観に影響された将来像を描きやすい進路多様校の生徒にとっては、家事・育児を自分が中心となって担うか否かという点が設定基準として重要であると考えた。
- 荒川(2009)は「小分類で、1%を超えた職業、また細目分類で0.5%を超えた職業」のうち、「その職業を希望している生徒の割合」(生徒全体に対する人数比)を「その職業についている人の割合」(国勢調査より算出した全職業人口に対する人数比)で割って「職業の希望倍率」を算出し、5倍以上の職業を「人気稀少職」とした。そのうえで、「大学・大学院卒業者の割合が70%以下」(＝学歴不問)の職業を、ASUC職業と定義している。本調査の対象者にはデザイナー志望者の多い工業科や、パティシエ志望者の多い農業科の生徒が多く含まれるなど、「人気稀少職」の構成が、普通科とは異なることが考えられる。今回は希望職の実現可能性を考慮し、より高校生全体の状況に近い荒川(2009)や長尾(2009)の具体的な内訳にあてはまるかどうかという点でASUC/非ASUCを選別した。
- 両側検定の場合、調整残差の絶対値が1.96(2.0)を超えていれば5%水準、2.58(2.6)を超えていれば1%水準で有意といえる。
- 専門高校で「仕事本位志向」が強いという傾向は、女子のみに特有な傾向である。男子の場合、仕事本位志向が「強い」比率は専門高校43.7%、普通科高校47.9%で、有意差は見られなかった。女子にとっては、専門高校を選択することや専門高校で教育を受けることが、仕事に対する強い志向と関連しているのである。

〈引用文献〉

- 荒川葉、2009、『『夢追い』型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂。
- 元治恵子、2004、「女子高校生の職業アスピレーションの構造——専門職と女性職」『応用社会学研究』46:67-76。
- 元治恵子・片瀬一男、2008、「性別役割意識は変わったか——性差・世代差・世代間伝達」海野道郎・片瀬一男編『〈失われた時代〉の高校生の意識』有斐閣、119-141。
- 堀有喜衣、2002、「高校生とフリーター」小杉礼子編著『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構、119-31。
- 片瀬一男、2005、『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会。
- 片瀬一男・元治恵子、2008、「進路意識はどのように変容したのか——ジェンダー・トラックの弛緩?」海野道郎・片瀬一男編『〈失われた時代〉の高校生の意識』有斐閣、93-118。
- 吉川徹、2001、「ジェンダー意識の男女差とライフコース・イメージ」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、107-26。
- 木村治生、2009、「性別役割分業に対する意識変化の要因を探る——都立高校生調査を手がかりにして」Benesse教育研究開発センター『都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書』、156-66。
- 長尾由希子、2009、「専門学校への進学希望にみるノン・メリトクラティックな進路形成」Benesse教育研究開発センター『都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書』、109-25。
- 中村晋介、2003、「ジェンダー・トラックの再生産」友枝敏雄・鈴木讓編著『現代高校生の規範意識——規範の崩壊か、それとも変容か』九州大学出版会、103-27。
- 山田昌弘、2008、「ゆらぐライフコース——少子化とジェンダー」江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学 入門』岩波書店、56-71。